第5回 はしか（麻疹）のお話し

はしかは麻疹ウイルスによる感染症ですが、1950年頃はまだ予防するためのワクチンもなかったため、生まれたお子さんはほぼ全員がはしかにかかっていました。人生で誰でも一度は経験することを「はしかみたいなもの」というように言われましたが、これはその頃の麻疹の状況を表していたものです。「はしかみたいなもの」というと、「たかがはしか」という風に、なんだか軽い病気のようにも聞こえますが、実際には麻疹は重症化することも多く、免疫の無い人がかかれば、患者さんの30%でなんらかの合併症を発症し、中耳炎が5～10%、6%に肺炎、0.1%で麻疹脳炎を発症し、1000人に1～2人が亡くなります。はしかは、決して軽い病気ではなく、死亡することもある疾患なのです。実際に1950年頃は年間に1万人前後のこどもたちが麻疹が原因で亡くなっていました。

その後、日本でも1978年に麻疹ワクチンが定期接種となり、死亡者は劇的に減少しましたが、2000年頃でも、まだワクチン接種率は80%程度で、当時日本全国で年間10～20万人の麻疹患者さんがでていました。その後は、国民のみなさまの意識の向上や行政の努力もあって、ワクチン接種率も上昇し、麻疹は地域ではほとんど見られなくなっていきましたが、ワクチン接種が1回だけではその効果にも限界があると言うことも判明し、2006年から1歳児（第Ⅰ期）と小学校入学前（第Ⅱ期）の2回接種となり、当時は経過措置として2回接種の機会が無かった中学生と高校生に2回目のワクチン接種も行われました。これらの結果、日本での麻疹はどんどん減少し、平成27（西暦2015）年3月には世界保健機関から麻疹排除を認定されました。これは日本国内でそれまで流行していた麻疹ウイルスの国内での伝播が消滅したという意味ですが、もちろん日本以外の国では、まだ麻疹の流行は続いておりました。このため、その後もときどき外国から持ち込まれる麻疹ウイルスによって国内での麻疹患者さんが発生していましたが、ほとんどは、麻疹ワクチンを接種したことの無い人と、1回しか接種していなかった人たちでした。

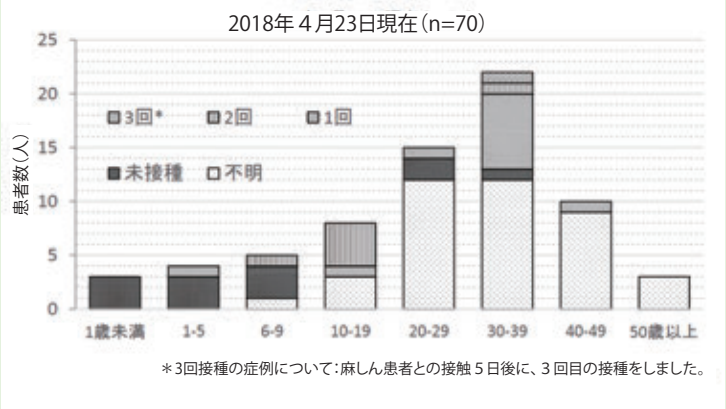
沖縄県では、平成26年以来麻疹患者は一人もみつかっていませんでしたが、今年3月23日にたった一人の麻疹患者さんを発端として、県内に広がり、愛知県などでも沖縄で感染した人を発端として患者がみられています。図に沖縄県からの記者発表によるこれまでの罹患者のワクチン接種歴と年齢分布を示しますが、20～30歳代の方が多く、また、ほとんどはワクチン接種歴が不明か1回の方たちです。

このようなことは、昨日まで麻疹患者さんがいなかった地域でも、一人の患者さんが出現することによって、即座に起こりうることです。特に、多くの人が集まる観光地や、まだまだ麻疹流行が続いている国では、感染するリスクは高まりますし、そこで感染した人が、地元に持って帰ってくると、そこで感染を広げてしまうことになります。

麻疹の最大の防御はワクチン接種です。これを機会に、自分の麻疹に対する免疫をチェックしてみてください。第1期、第2期の定期予防接種の時期の人は接種を確実にして頂き、小学生以上で、検査診断された麻疹の罹患歴がない場合は、必要回数である2回の予防接種を行っていることが、自分と、自分の家族と、そして地域のみんなを麻疹から守ることにつながります。

（臨床研究部長　谷口　清州）

沖縄県における患者の年齢分布とワクチン接種歴



沖縄県ホームページより引用
（http://www.pref.okinawa.jp/site/hoken/eiken/kikaku/kansenjouhou/documents/fig2_20180423.pdf）